

物語の生まれる場所

浜矢 スバル

「ごさ、神様を連れできなくなんせ」

立花ハナさんが、介護職員の若い男性——諒一に迫る。

諒一はタオルを畳む手を休めずに微笑んだ。

「ええ、分かりました。明日には」

薄い日差しが、窓辺のカーテン越しに柔らかく差し込んでいる。

低い声でラジオがかすかに流れ、介護職員の靴音がトントンと響く。車椅子に座る老人が、手に握ったハンカチを何度も揉みしだきながら、窓の外の庭をじっと見つめている。

窓際の小さなテーブルには、薬の入ったカップや水差しが並び、誰かがつい先ほど飲み残したお茶の匂い、消毒用のアルコールの匂い、それに僅かだが大小便の匂いも漂う。

ここ、『遠野やすらぎの郷』は、民話のふるさと——岩手県遠野市にあるユニット型の特別養護老人ホームである。

ユニットとは、入居者の生活の単位であり、建物の構造であり、そしてまた職員の組織のことでもある。各ユニットに、およそ一〇人前後の入居者が割り振られ、個室のほか、共同のリビング、キッチン、浴室、トイレが備えられている。

家庭的な雰囲気で、入居者が生活をしていくための配慮だ。

「オラはさ、もう家さ戻って、神様のお世話を出来ねえ」

「そうなんですな」

「んだがらさ、神様をさ、ごさ連れできなくなんせ」

「分かりました。明日には」

諒一の対応は、介護職員としては正しい。

理不尽なことを言う相手も否定せず、共感の言葉を語る。こうして、やり過ごせば、施設の老人達は大人しくなり、暫くたてば、会話自体を忘れてしまう。

いつもと同じやり取り——だが、今日のハナさんは普段と違った。

「お前めさんは、昨日も一昨日もそういったでねえが。もう待てね」

声を震わせ、手元のベッドのシーツを握りしめる。

「もう、秋だ。お祭りの季節だ。神様をほおっておげね」

* * *

「立花さん、あれが無ければ、手のかからない人なのに」
諒一が椅子に腰を下ろし、深く息をついた。

蛍光灯の白い光に照らされた事務室。壁際に並んだスチールの棚には、利用者ごとのファイルが色分けされた背表紙を揃えて収められ、引き出しには書類の束が詰まっている。
「ムギちゃん、ご近所でしょう。何とかならないの」

施設専属の女性看護師、山下さんが聞いて来た。

「無理言わないでください」

細 （泣く） はファイルの整理する手を止め、窓から外を眺める。

六角牛山と権現山。二つの山に挟まれる形で伸びる沿岸に向かう県道、その中途にある樹木に囲まれた集落、そこに細の実家はある。立花家があるのは、さらに山道を進んだ先。広い敷地にある、お屋敷と言えるほどの大きな旧家。戦前までは、木材の伐採の口入や仲買をしていた家柄だったそうだ。

ハナさんは、昔、すごく美人だったと聞いた事がある。旧家の一人娘として、旦那さんを養子として迎え、二人の息子と、一人の娘をもうけ、家を守ってきた。

だけど、戦後の高度経済成長期、集落の状況は大きく変わった。

林業が衰退したため、集落内の仕事は少なくなり、三人の子は家を離れた。旦那さんは十年以上前に亡くなり、成人した息子と娘は、皆、別な土地での仕事と生活を持った。もう、遠野の古いお屋敷に戻って生活することは出来ない。

一緒に暮らして欲しい——三人の子供達は、それぞれ母親に言ったのだけど、ハナさんは、一人で大丈夫、この土地を離れることが出来ないと言いつつ張り詰めた。

だけど歳月は確実に体力と気力を奪っていった。半年前、近所の人がお屋敷を訪ねた時、ハナさんが、勝手口の床に座り込んで動けなくなっている姿を発見した。

救急車が呼ばれ、家族が呼ばれ、三人のお子さんと市役所の職員、それにこの施設の職員とで、話し合いが持たれ、結局ハナさんは、やすらぎの郷に入居することに決まった。
母を、よろしく頼む——ハナさんが入居する時、顔見知りの息子さんに、深々と頭を下げて頼まれた。

「神様かあ」

細は、窓の外の山並みを見つめながら、静かに息をつく。

記憶を辿るうちに紬の胸に一つ、思い当たるものがあった。

遠野は民間伝承と宗教の区分のない、独特の世界観がある地域だ。

山・川・森に神が宿り、先祖の霊も家や土地を守る。神々は身近にいて、人々の日々の暮らしに関わり、各家はそれぞれ独自の神を祀る。

神や精霊、死者が日常生活と地続きに存在するのだ。

立花家のお座敷には、祭壇が置かれている。

元々、お屋敷の前には庭に続きいて小さな広場があり、その小さなお社で、そこに祀られていた神様なのだと聞いた。集落に多くの人がいた頃は、毎年、秋の稲刈りが終わると、その広場で、ちよつとしたお祭りが催されていたという。

もしかしたら、ハナさんの言う神様は、あの祭壇に祀られているのではないか。

* * *

ハナさんの身体が小さく震えていた。

「良くおでんした」

かすれた声が漏れ、目尻からゆっくりと涙がこぼれた。頬を伝う涙は皺の谷をなぞりながら、静かに落ちる。

「これが先、精一杯、お世話させていただきあんす」

白く細い指が伸び『神様』に触れる。

ハナさんのいう神様は古びた二体の木像だった。

紬は、ハナさんの息子さんの一人に連絡をとり、屋敷の祭壇にあった素朴な木像を持つてきたのだ。

木の棒状の胴は細く、色褪せた布の衣が幾重にも巻かれている。白く塗られた顔には、朱の線で目と口が描かれ、まるで笑っているようにも見える。布の隙間からのぞく木肌に艶がある。二体あるのは、男女一對の夫婦という事だと思う。

遠野の他の旧家で祀られているオシラサマという神像と、ほぼ同じなのではないか。

ハナさんは両手を合わせたまま、何度も木像に頭を下げた。

「大事にしてきたんだな」

一緒に、木像を持って来た息子さんが呟いた。

ちよつと違う。紬はそう感じた。

ハナさんにとって、この木像は、信仰の対象というだけではない。長い間、一緒に、あの家で過ごし、季節の移ろいや喜び悲しみとともに感じ、孤独な日々を寄り添ってきた。最も身近な同志なのだ。

* * *

ハナさんの個室に入口で、小さな男の子が、室内に向かって手を合わせている。
「松岡さんのお孫さんなの」

山下さんが、袖に囁いた。

「松岡さんに面会に來ると、いつも、あの像を拜んでいくのよ」

「何か、小さな子にだけ感じるものでもあるのでしょうか」

入居者の健康状態を記した書類を受け取った袖の耳に、ハナさんが木像に向かって語りかける声が聞こえてきた。

「もうすぐさ、秋であるす。あの庭の柿もさ、もう色がついてんだべが」
穏やかな表情で、まるで昔の友人に話しかけるような言い方だった。

* * *

「ここしばらく、ユニットの雰囲気が良いんですよね」
湯呑を両手で包みながら、諒一が笑った。

「いい事じゃない」

パソコンへの入力作業をしながら、袖が返答する。

「あのユニットの入居されているクセが強い方が多くて、正直、手を焼いてたんです」
言葉を探るように、諒一は湯呑に視線を落とした。

「でも、不思議なんですよ。最初は、ただの飾りくらいに思っていたんですけど、あの神様を置くようになってから、ユニットの空気が変わったんですよ」

「——どんな風に」

「ハナさんが、手を合わせていると、不思議と、他の人たちも静かになる。怒鳴ったり、呼び鈴を鳴らしたりする人も減りました。朝食の時なんて、前よりずっと穏やかですよ」

* * *

廊下を歩いていった紬の目の前で、ハナさんのいるユニットの引き戸が開いた。山下さんの押す車椅子に乗って、入居者の老人が出てくる。

「どうしたのですか。杉本さんのユニットは隣ですよ。」

「参拝して来たんですよ。神様に」

山下さんが澄ました顔で答えた。

「神様って、ハナさんの」

「ええ、一日一回、立花さんとこの神様を拝むと、杉本さん、とても落ち着くの」

言いながら指差す先、ハナさんの部屋の前で、数人の入居者が手を合わせている。

「信仰って、理屈じゃないのよね、何というか、あの像、皆さんの心の拠り所になっているみたい」

* * *

誰かに呼ばれたような気がして、深夜、紬は目を覚ました。今日は宿直だ。

宿直室のカーテンの隙間から、月明りが漏れだしている。

ベッドから体を起こし、カーテンを大きく開く。

吸い込まれそうなほど、真ん丸なお月様が夜空に浮かんでいる。

『遠野の近くに、人の目には見えない隠れ里がある』

『誰も見ることが出来ない隠れ里だが、満月の夜、遠野の町と隠れ里が重なる時がある』

『満月の夜、外で出会う人には気を付けろ、隠れ里の者かもしれない』

子供の頃に聞いた、そんな話を思い出す。

一体、誰に聞いた話だったろう。

古い言い伝えなのか、子供だった紬を怖がらせるつもりだったのか、それとも、夜に外に出歩かないように戒める意図があったのか。

他愛ない御伽話と言ってしまうえばそれまでだけど、こんなに光を湛え、輝いている満月を見ると、その話に一抹の真実味を覚えてしまう。

なんだか、眼が冴えてしまった。

朝の見回りの時間には、大分、早いけれど建物の様子を見に行こう。

窓を通して月明りが注いでいる。

廊下を歩くうち、紬は奇妙な感覚に捕らわれる。

いつもと同じ光景だが、何かが違う。何かおかしい。

窓から外を眺めた時、気が付いた。

そう。周囲が、あまりにも静かなのだ。

虫の泣き声がしない。風の音もない。

この季節、普段なら明け方まで秋の虫が騒ぎ、風で草木が擦れる音が絶えないのに。

今夜は、自分の履くサンダルが廊下の床を踏みしめるだけが周囲に響いている。

寂然としない思いを抱えながらも、廊下を進む。

ハナさんのいるユニットのに近付くと、窓からの月の光が一際強く感じられた。

月光が、まるで水面の揺らぎのように、床に淡い模様を描いていた。

引き戸を開き、ユニットの中に入る。

ここも、いつもと様子が違う。入居者の寝息も、宿直の職員の物音も、すべての音が、

何処かに遠のいている。

人の気配が薄れ、夜の空間そのものが呼吸しているように感じられた。

一体、何がどうなっているのか。

戸惑う紬の耳に、微かな人の声が届いた。

ハナさんの声だ。

いつも通りの、擦れた、訛りのある呟き。ユニットの奥、個室の方から聞こえてくる。

紬は、個室の戸口の前に歩を進める。

近付くごとに、呟き声が胸の内側を撫でていき、床の月光が静かに手招きをしているよ

うに感じられる。

開けてはいけない。

心の何処かで、そう思いながらも、紬は手を伸ばし引き戸がわずかに開く。

周囲の空気が、まとも少し変わったように思えた。

開いた引き戸の隙間から、ベッドに寝たまま、ハナさんが掌を合わせている姿が見えた。

二体の木像が微かな光を帯び、枕元からハナさんを見下ろしている。

月明かりが白い布団を銀に染め、神様と小さな老婆を、やさしく包んでいた。

『ハナ、お前は、よくやった』

突然、紬の胸の奥に、その言葉が届いた。

『長い間、ずっと私達に仕えてくれた』

耳を通して聞こえているのではない。胸に奥に、言葉が突然浮かぶのだ。

『一人で、良く家を支えてきた』

『他に誰も居なくなつた場所を、今までずっと守ってくれた』

『辛かっただろう。たった一人で』

「神様、オラは、一人では、ありませんでした」

ハナさんが呟く。

涙が光をまとい、静かに老婆の頬をすべり落ちた。

「オラのそばさは、いづも、神様が居て下さいました」

月の光が揺らめいている。

紬は、引き戸を開けたことを悔やんだ。

神様との対話——これはハナさんの心の内面だ。

他者が見てはいけない光景だ。

* * *

「ムギさん」

自分の名と共に、宿直室の扉が叩かれる。

「ムギさん、起きて下さい」

意識が定まらないまま、紬は時計を見た。

五時を少し回ったところ。いつもなら、もうすぐ見回りの時間だ。

「どうしたの」

身支度もしないまま扉を開けると、諒一が蒼白な顔で立っていた。

「立花さんが——ハナさんが」

その声が震えている。

「とにかく、来てください」

諒一の後について早足で進む。

廊下に響く自分達の足音がもどかしい。

窓からは夜明け前の薄明かりが差しこみ、空の高みにまだ月が残っている。

やはり宿直だった山下さんが、既に、ハナさんの個室に来ていた。

紬の顔を見上げ、小さく首を振る。

ベッドの上のハナさんは、微笑みを浮かべたままだ。その両手が胸の前で合わせられ、

まだ、祈りを続けているように見えた。

窓辺のカーテンが揺れ、朝の光が、ハナさんの頬を一瞬照らす。

その頬には乾いた涙の跡が残っていた。

(了)